



交流と福祉で地域をつなぐ新公民館構想

～地域の未来を支える「縁側」のような存在へ～

発表者：Bグループ

発表日：2025年10月19日

北栄町が直面する地域課題（地域福祉推進計画より）

- 少子高齢化と孤独

- 地域活動の担い手不足が深刻化し、コミュニティの活力が低下しています。
- 高齢者の孤立も増加傾向にあります。

- 社会参加の壁

- 障がい者の社会参加機会や引きこもり支援が不足しており、多様な住民の居場所づくりが課題です。

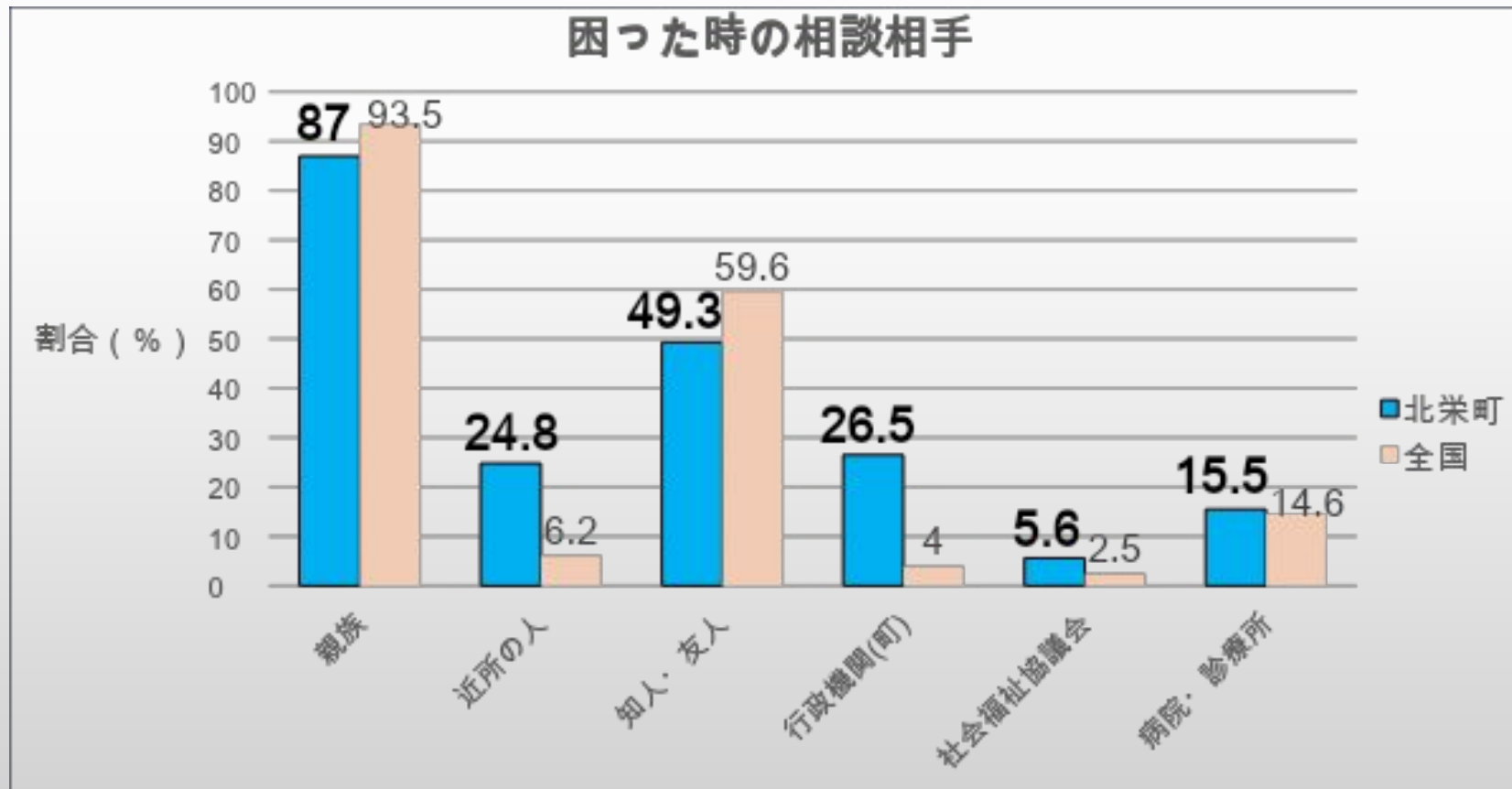
- 健康と安全

- 健康寿命の延伸と地域の災害対応力向上が求められています。

地域社会を取り巻く環境は、大きな転換期を迎えています。これらの課題に対応するため、新たな地域拠点の在り方が求められています。

困った時、誰に相談しますか？

- ・地域のつながりが変化する中で、住民は誰を頼りにしているのでしょうか。以下は、「困った時の相談相手」についてのアンケート結果と全国データとの比較です。



注1) 北栄町の数値は地域福祉推進計画住民アンケート(令和6年)、国数値は人々のつながりに関する基礎調査(令和5年)

注2) 国数値は相談相手が「いる」と回答した人を集計対象としており、町は相談相手の有無にかかわらず集計対象としているため、調査方法が異なる。

注3) 町、国ともに選択肢にあげている項目のみ表示している。

注4) 国調査の問は「不安や悩みの相談相手の種類」、町調査の問は「困った時や生活の問題の相談相手」

データから見える北栄町の特徴

•高い行政への相談率

•「行政機関」に相談する人の割合が、全国平均の4.0%に対し、北栄町は26.5%と非常に高いです。

•近隣との強いつながり

•「近所の人」を相談相手とする割合が全国の**4倍近く**あり、近隣のつながりがまだ残っていることが伺えます。

•社協の役割

•「社会福祉協議会」を相談相手とする人も全国データより多く、福祉の専門機関として認識されています。

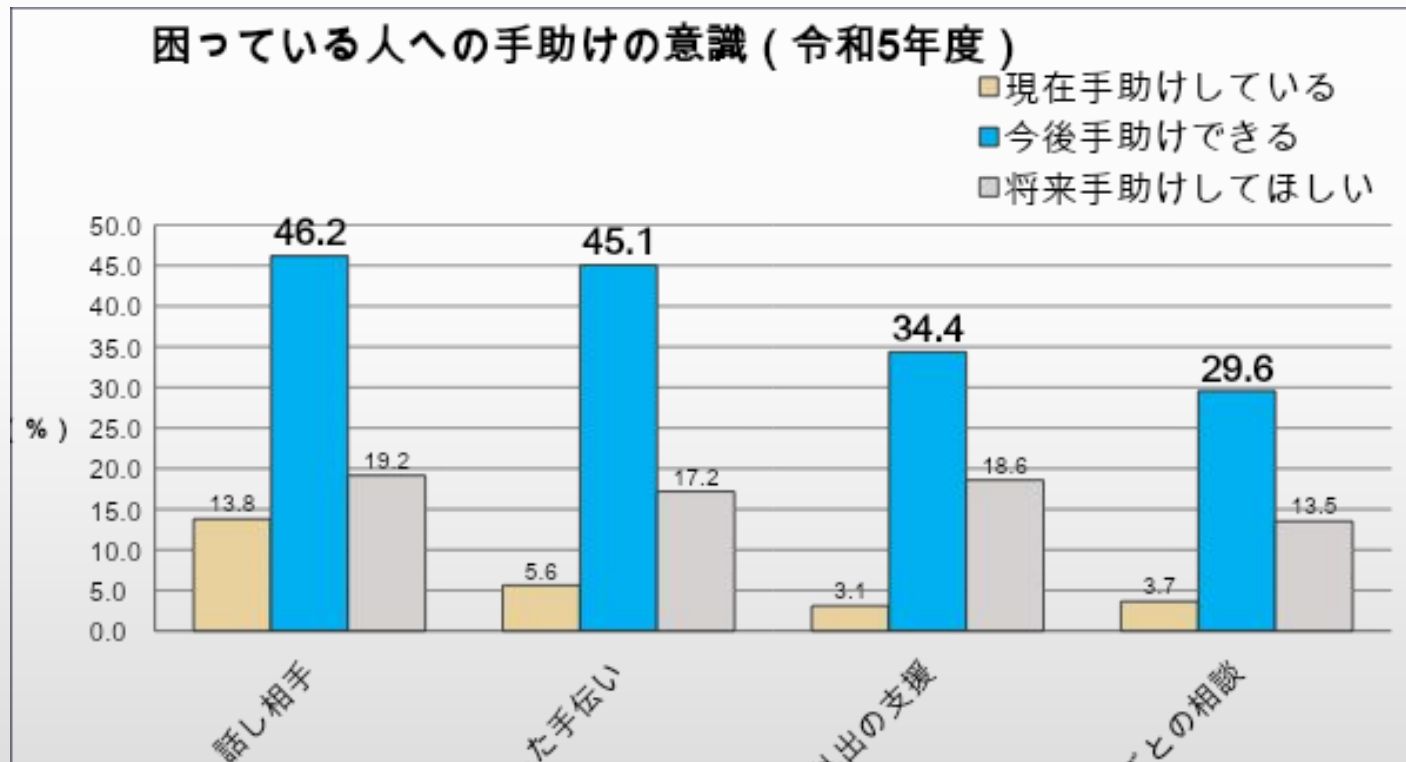
•これらの結果は、「行政と社会福祉協議会の連携」が住民の安心につながる重要な鍵であることを示唆しています。

潜在的な「支え手」の掘り起こし

- 地域にはボランティア活動への意欲を持つ住民が数多く存在していますが、その力が十分に活かされていない現状があります。

•ボランティア登録率の比較

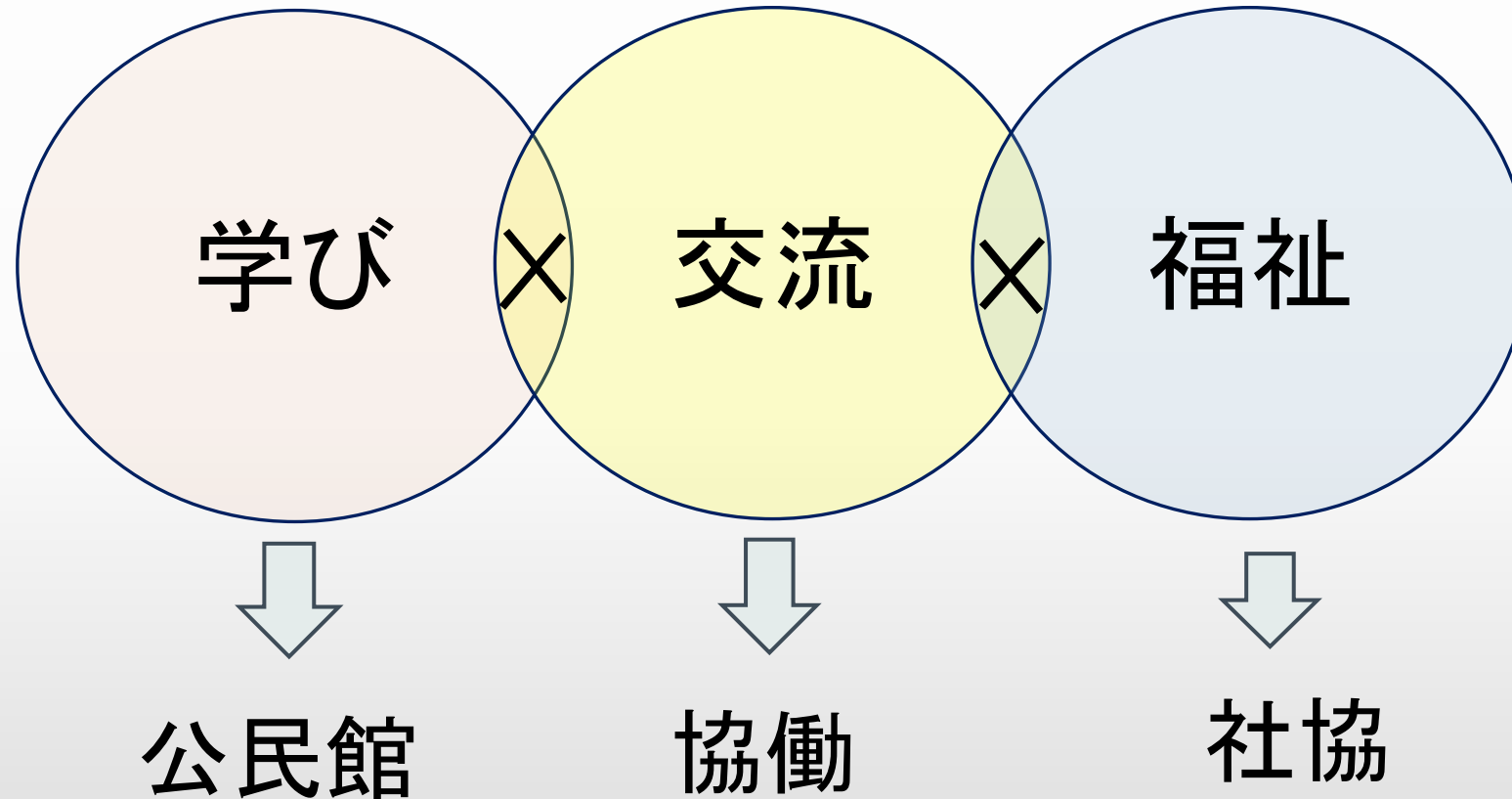
自治体	人口	登録者数(推定)	登録率(%)
北栄町	15,000人	449人(R5)	約3.0%
某中山間市A	20,000人	1,200人	約6.0%
某町B	12,000人	800人	約6.7%



令和5年地域福祉推進計画住民アンケート

「機会がないだけ」という住民の声が示すように、担い手不足は意欲の不足ではなく、参加の仕組みづくりが課題です。

従来の機能を超えた統合型拠点へ



新しい公民館は、単なる集会施設ではありません。地域の交流を促進し、福祉サービスを身近にし、住民の安心を支える**多機能型の地域拠点**として生まれ変わります。
それは、誰もが気軽に立ち寄れる「縁側」のような存在です。

安心の拠点を創る 常設相談窓口の設置



社協窓口の常駐

社会福祉協議会のスタッフが公民館に常駐し、日常的な相談に対応します。



社会的処方の実践

福祉的支援や地域活動への参加を通じた課題解決を提案します。そのオーダーメイドの処方箋が生涯教育と協働することでバリエーションが広がります。



一次相談窓口

あらゆる相談を受け止め、適切な支援機関につなぐハブ機能を果たします。

困りごとを抱える住民が、最も身近な場所で安心して相談できる体制を整えます。

多世代の「居場所」と「つながり」の創出

年齢や立場を超えて、誰もが自然に交流できる場をつくります。世代間のつながりが、地域全体の支え合いを育みます。

リアルじいちゃん ばあちゃん事業

- 年齢や立場を超えて、誰もが自然に交流できる場をつくります。世代間のつながりが、地域全体の支え合いを育みます。

子ども同伴歓迎

- 小さな子どもを連れた親も参加しやすい環境を整え、子育て世代の孤立を防ぎます。
- マッサージやヨガ教室、料理教室(晩御飯をそのまま持ち帰り)、パン教室など

地域食堂の開催

- 食事を共にすることで自然な会話が生まれ、日常的なつながりが深まります。
- 地域食堂、こども食堂、マルシェなど

支え合う仕組みと人材育成

ボランティアセンター機能の拡充

地域の支え合い活動を組織化し、潜在的な担い手を発掘・育成します。マッチング機能を強化し、誰もが参加しやすい仕組みを構築します。

災害ボランティアの拠点化

日頃から相談窓口と認知されると、災害時に困り事の情報が集約されやすくなります。そして、防災訓練や研修を実施し、災害時には迅速にボランティア活動を展開できる拠点として機能します。

公民館こんにちは教室（出前型）

公民館で学んでいる人や講師は人材バンク。公民館が持つ人材が地域に出て出前教室を行います。公民館機能のアウトリーチ。



住民自身が地域を支える力を育て、持続可能な支え合いの文化を根付かせます。

観光と連携した地域活性化

公民館を地域の魅力発信拠点としても活用し、観光客と住民の交流を促進します。新たな人の流れが、地域に活力をもたらします。



観光客と住民の交流促進

観光客が立ち寄れる場所(オブジェ等の仕組みは必要)として可能性大。地域の歴史や文化を伝えるイベントや地域カフェ、郷土料理教室(むかごご飯、長芋とろろ汁等)などを開催し、観光客が住民と触れ合う機会を創出します。



生活移動手段の確保

公民館⇄郵便局⇄道の駅ほうじょうの定期便を運行。観光客の移動手段として開始し、その後誰でも利用可能とすることで住民の日常的な移動をサポートします。町内福祉事業所の協力を得て、事業所の空き車両を活用します。



体験・移住情報の発信

地域での暮らし体験プログラム(住民が活躍できる場としても)や移住相談窓口・情報コーナーを設け、関係人口・定住人口の拡大を目指します。

暮らし続けたいまちへ

交流×福祉×安心の統合

分断されていた機能が一つの場所では機能的につながり、誰もが支え合える社会を実現します。

住民主体の持続可能性

住民自身が担い手となり、地域を支える仕組みが世代を超えて受け継がれていきます。

「暮らし続けたい」の実現

この地域で安心して暮らし続けたいという住民の願いを実現する基盤として、新たな公民館の役割を確立します。

